

ゆふだちの雨は高根をこえにけり
並木の松に風をのこして

「謹解」 さつと降り過ぎる夕立の雨はもう向ふの高嶺を越して了つた。併し一しきりこれが爲めに潤ふた並木の松からは涼しい風が吹いて来る。これ夕立の雨の名残である。

雷霆霹靂、驟雨沛然、雨脚斜めに飛んできて降り過ぎるこの早いこもよ。この雨が降り度いが爲めに風もなくしてむしろ暑かつた。所が一しきり雨が降つて、並木の松から涼しい風がそよ／＼と吹いて来る時分には、もうその夕立の雨は向ふの山を越えて行つて了つた。何たる壯大な、爽快な御作であらう。

冬ふかき池の中にもほごばしる
水ひこすちはこほらざりけり

「謹解」 冬深く嚴寒の候にもなつて、池の水は氷に閉ぢて了つたが、一筋の噴水だけは凍らない。ほごばしる水とは噴水である。何故噴水は凍らないかといへば、水の活動力が嚴冬の寒冷に打ち勝つが爲である。勢込んで進まれる水の力は、一丈も、二丈も高く空中に打ち上つて、さうして四方に飛散する。氷點以下の冷氣も物かはさ進めるこの活動には、またわれ／＼が深い教訓を受けるものであるが、殊更御製を拜しては更に／＼發憤する許りではないか。豊明殿の御庭にある圓形の大噴水がいつも勢ひよく水をふき上げて居るのを拜見してもかしこげれど御懐しさが増して来る。

文机にかざれる玉の光りまで

寒くぞ見ゆる霜さゆる夜は

「謹解」 冷かに霜が冴ねた夜は物皆も凍るであらう。手近な文机に飾つてある玉の光りまで何となく寒い様に見える。

白玉の光り、夏は涼しく見ゆるが、冬は殊に寒い感じがする、それが外に霜が眞白に冴ねた音なき

深夜の寂寞を思ふと、一倍凛々たる寒光の身に迫るを覺て、心も自づから引き緊まるものである。巧なる御製なるかな。

木枯の吹きはらしたる大空に

遠山見えて夜は明けにけり

「謹解」大空に閉ち凍つた雲を木枯が吹き晴らしたから、遠山さへもはつきりと見えて夜は明けた。

木枯は木嵐の轉といふ。吹きハラシタルの一句に雲が閉ち凍つて居つた事が分る。遠山も見ゆるといふのは、吹き晴らしたといふ事の證句であつて、夜は明けにけりと結ばれたのは倒叙的説明である。誠に雄大なる結構、勁直なる聲調と感服し奉る外は無。

みじかしと思ふ心に冬の日

なかなかもものはかどりにけり

「謹解」冬は短日であると思ふから自然心が引き締まつて、却つて仕事が果敢きつた。

ナカナカは「却つて」といふことである。日が長いと思ふと却つて心が緩むものであるが、短いと思へば奮發しなければと勵む。そこに自然の妙理はある。これ御身親ら事に當らせられた御實験上の御製であつて、宜しく正に體得すべき聖訓である。

萱の根の長きはる日はなかくにもものにおこたる人ぞ多かる

この聖作と對照拜吟して自ら省るの力あらん人は將來の結果必見るべきものがあらう。

人皆のおどろき顔にしむかな

にはかに暮るる年ならなくに

『謹解』 俄に年が暮たのでもないのに皆の人はもう年の瀬だくと驚き惜む。
大禹は寸陰を惜んだ、一般の人は分陰をも惜まなければならぬ。實際かやうに寸陰分陰を惜んで、常に懸命の努力をしたならば何時年の瀬が来やうとも決して驚くには足らないものである。況して年の瀬は一足飛びに来るものではなくして、自然に月日を追うて迫つて来るものであるから、これに備へんとするの用意は初めから豫定する事の出来るものであるにも拘らず、總ての人は年の瀬の間に於て、俄に來た様に驚き騒ぐの愚を戒しめ給へる御垂訓である。

ふりつもる雪をしのぎて咲く梅の

花はいかなる力あるらむ

『謹解』 降り積る雪の寒さをも堪へ忍びて咲き梅の花にはさういふ力があるのであらう。
雪が降るから寒い、寒いから雪が降る。大抵のものは皆凍に委ねて冬を過すだけでも容易でない様な時に方つて、その寒さにも耐へ、その雪をも凌いで咲く梅の花には、何か他に特殊な力があるの

ではないか。假令雪や寒さに堪へ得る素質を持つて居るにしても、あのか弱い薄い花瓣を一杯に擴げて、いかに冷たくても落ちず、いかに風が吹いても散らないのは實に非常な力を持つて居るものであるまいか。

これは御詞に現れた丈の謹解であるがこれを拜誦してその御言外の深遠なる御偶意あるかを見分る力がほしいものである。

まごたく夜あらしさむし埋火の

うへにも霜のちるこちちして

『謹解』 烈しい夜あらしの風が窓を叩いて吹いて居る時は埋火の上にもその風の爲めに霜が吹き散らされて來るかと思はれて此上もなく寒いものである。

上の句に窓を叩くにあるのに對して、埋火の上に霜がちるを受けてある。これは夜風が霜を吹き散らしたのが散り込んで來るのではないかといふ心を、それと言はずに現されたものであつて、かく

て一層寒いといふ観念が強く伺はれるのである。

埋火のもごにいざなへふる雪の

はれまもまたできたる老人

「謹解」 晴れ間をも待たないで雪の降る最中に来たあの年寄りを早く埋火の邊りへ連れて行って、暖を取らせよ。

参内の時刻に後れては己の眞心から、雪を犯してまるのほつた老人は驚かし寒い事であらう己の仁天の大御心は、發してこの御製となつたのである。これ單り老人のみの感激では無い。實に七千萬國民の舉つて感激し奉る所である。

ふきおろす峰のあらしに山里は

きのふの雪ぞけふもちりくる

「謹解」 颯々たる峰の嵐は昨日降つた雪までも吹きおろすから山本の里では、また今日も雪が降るのである。

昨日の雪がけふ降るは實に奇想天外の結構である。而もこの奇想天外の註釋は上の句によつて明瞭に示されてあるのは、眞に言ひやうも無い巧みである。これを拜誦して坐ろに寒冷の情を偲ぶのも決して自分一人ではあるまいと思ふ。

庭しろくみゆるは月の光りにて

雪は早くも降り止みにけり

「謹解」 雪がもう積つたと思つて見た庭の白い光はそれは雪ではなくて何時の間にか晴れた空に照る月の影であつた。

雪が降り出した。積つたならば野山の景色は一層美化されるであらうと思ひ楽しんで、さてもう己の位降り積つたかと思つて庭を見れば、雪は何時しか止んで、眼のあたり一面に白く見わたるのはそれ

は月の光りであつたといふ様はこゝは、歌人も詩人もよく口にする處であるが、この御製の「雪は早くも降り止みにけり」の御巧なる御言ひなし御力のある御調べと拜誦しては言外の神韻にうたれる事である。

めづらしき思ひもあへずこけにけり

霜よりうすきけさのはつ雪

『謹解』霜ほきもない僅な雪も初雪であるからと思つて珍しがつて居るうちに融けて了つた。

初雪を珍しがる事は昔も今も變りはないが、降ると見て喜ぶ後から融けて了つて餘りに本意ないものである。併、霜が濃くおりの時は、雪が薄く降つた様にも見ゆるが、その霜よりも薄い初雪、否初雪としては薄いから風情がある。又珍しき思ひもあへず融ける所に興がある、初雪の初雪らしいきさまが遺憾なく表はれて居る。

いそ山をばなるる月に聲をのみ

きさきし千鳥の影も見えつつ

『謹解』磯に突き出た山から月が明かくと登つたので今まで鳴く聲だけしか聞かなかつた千鳥の飛ぶ影までも見ゆる。

この御製を拜誦すると、先づ宵暗に山や海や空の境も定かに分らずに只黒々と見ゆるばかりの何處にか千鳥が鳴く聲がやさしう聞えて來る海邊の有様が思ひ浮べられる。續いて向ふの山の上がだん／＼明るくなつて來てやがて清らかな月がさし昇ると、山と空との間にはつきり見えて、水には激漣たる浪が輝き、今まで鳴いて居つた千鳥の飛ぶのがさだかに見分けられる様になつた。一層聯想を逞うすれば立派な畫が出来る。然らば則ちこの御製はこれ有聲の畫である。

ありこある人をつごへて春ここに

花のうたけをひらきてしかな

「謹解」 毎年々々の春毎に總ての人々を呼び集めて花見の宴を催して見たい。

年々歳々立ち返る長閑な春毎に世の中のありこ有らゆる人、日本國民は元より如何なる國の人々でも構はぬ。悉くの人を呼び集めて、樂い花見の宴會を催さうと思召された明治天皇の大御心は實に寛大にして恬淡、眞に天の御心であるを申し上げたい。今日平等を唱へながら人種に差別をつけて改めない様な國の人々にも充分にこの御製の御意味を聞かせて遣りたいものである。

神風のいせのみやるをがみでの

後こそきかめ朝まつりごこ

「謹解」

毎日々々の政治を見る前に先づ伊勢の皇太神宮を遙拜して遠く天照大神の明鑑を仰いでそれから國事を裁決する。

日本帝國の今日は、一に皇祖皇宗が國を初め徳を樹て給ひたる賜である。さればその祖宗たる神の大本にまします天照大神を齋き祀つた伊勢の太神宮を遙拜して、一は國運の發達に冥々の御加庇あらせられた事を感謝し、一は尙其の日々に起る新なる國事を悉く進める事の出来る様にこの御祈念を凝らされて、さうして大政を繼し給ふ御事は、これ躬を以て敬神崇祖の實を布かせられたる又なき御教訓である。實際我日本が今日世界的に偉大なる力を持つ様になつたのは、この敬神崇祖の美風がある爲めである。これわが日本帝國の國體を表明し、又大和民族の信仰を表白する一大概念である。

のる駒に小草はませてやすらへば

くらのうへしろく花ちりかかる

「謹解」

花の木かきに手綱をゆるめて、馬には柔かい草葉を食はせ、自らも暫し息強ぐ所にはら

く花が散りかゝるのは誠に得も云はれぬ風雅やかなものである。

「小草はませて」と詠ませられた所にこの御製の第一の生命はある。勿論主なき鞍の上が白くまで花の散りかゝる風情は、優にやさしいものであるが、この優しい風情を見て疲れを慰める主の興と同じ様に、乗つて来た馬には自由に小草を興へる情ある心遣ひを眼の當りに見上げ参らす程である、これ實に惠澤禽獸に及ぶものとも申し上ぐべき事である。

舟うけてむかしあそびしふるさこの

池にや月のひそりすむらむ

『謹解』昔は故里の池に舟を浮べて月を樂んだ事があつたが、今は月だけひそり澄み渡つて居るであらう。

懐舊の情まぎく三十一文字の上に見えて居る。しかも嘗ては月と共に遊んだ池には、今は吾が身はあらで、月だけがひそり淋しく照して居るであらう、昔も今も同じ様に照る月を見て、坐るに

故郷の古事を偲ばれるこの御意味である。

すすみゆく世に生れたるうなるにも

昔のことは教へおかなむ

『謹解』日進月歩移つて行く新しい世に生れた幼ない子供にも我國の昔の事などは教へて置かうよ。

温故知新とは千古の格言である。殊に三千年來由緒ある我が皇國にあつては、いかに新時代新文明の世に生れた子供だからといつて、その國家の傳承を物語つて、新しき事にのみ氣を奪はれぬやうにせねばならぬ、根深い傳統的の思想を培養しつ、そこに強い觀念を保持することが必要である。況んや我が建國の精神が眞に日に新にして又日々新なるべき一大自然によつて現されたものであるをや。

おのが身はかへりみずして人のため

つくすぞ人の勤なりける

『謹解』 自分の身を顧みずして人の爲めに盡す所の犠牲的觀念は、これ實に社會の一員たる人の當然の務である。

身を殺して仁を爲す、義を見てせざるは勇なきなりとは古人も言うて居る。人の爲めに盡すのはやがて自分の爲である。徳孤ならず必ず隣ありで、持ちつ持たれつして立つ世の中には自分の事ばかりを思ふ個人主義では通られない、元來人といふその字義は二つのものが互に支へ合つて居るか如く、相互利害休戚を同じうしてこそ意義があるのである。しかもこの意義を明かにしようとしたならば、先づ自分よりも人の爲めに闘ふことが第一である。

世の人を教ふることも難からむ

身のおこなひのただしからずば

『謹解』 自分の身の行ひが正しくなくしてきうして世人を教へ導くことが出来やう。導くことは出来ない。

凡そ教ふるは習ふの一端である。人を教へんじすれば先づ自ら修めなければならぬ。自ら修める事が出来なくて人を教ふることは、それは大變な間違ひである。假令教へる事の條理は通るにしても、これを實際に示すことが出来なくては、つまり人を感孚せしむることは出来ないものである。

なすことのなくてをばらば世に長き

よはひをたもつかひやなからむ

「謹解」 たゞひ百年の長壽を保つても何もすることがなくて死んで了つたならば長生きをした甲斐もないであらう。

人はこの世に働かなければならぬ天分を持つて生れて来たものであるにも拘らず、何事も爲し得ずして終る事があつたならば、それは醉生夢死である。その齡が如何に百年の長さを誇らうとも、遂に何等の價値も無い。大に努めて小にしては自己の存在を確保し、大にしては依りて以て國家に貢獻する所があつてこそ、初めて人の人たる光りは放つものである。

しる人の世にあるほどにさだめてむ

古きにならふ宮のおきてを

「謹解」 舊例古格を本とする宮廷の諸法規は其の事柄を能く心得て居る人々の無くならぬ内に取極めて置かなければならぬ。

昔ながらに定められた宮室の掟は、今日では皇室典範なきがあつて、その大體は明かに示されて

あるけれども、その年中行事の總てには矢張り語り継ぎ語り傳へたるものもあるから、今これを承け傳へて明かに心得て居る者の生きて居るうちに、微細の事まで定めて置きたい。さうでなければ或は事を誤つて傳へたり、間違つて行ふたりする様になるかも知られぬからこの深い思召のある御製である。

この秋はいかなる野邊にたびねして

いくさならしのわざをみるべき

「謹解」 今年の秋はまたぎんな地方の山野に旅寢を重ねて大演習の統監をするであらうか。

年々の秋季大演習に必ず、行幸あらせられた事は今更申すまでもない、或時は氷雲或時は風雨の行在所を野に置くこともあれば山に置くこともあつて、しかも尙去年は西、今年は東と替つた計畫を企てるものであるから、今度はこの野末に出掛けて行くことであらう。併しこれも國家を守る行事の一つとしてなくてはならぬ事であるから、決して勞を厭ふ譯ではないぞ、この渾き思召である。

あけがたの霞のうちにつまなく

きえゆく月のかけのしづけさ

『謹解』 霞罩たる夜明の春の空にいつのまにや月が音もせず静かに隠れ行く光景の美はしさ。春になつたからほの／＼と明け行く空に霞は立て置めて居る。宵から臙に照らした月影は次第々々に西に傾いて、その白い光りが何時しか自づと消れて行く。何と静かにも麗かな情景ではないか。この御感想を叙し遊ばされたのである。

山ちかくすみし都をなつかしこ

さらにぞ思ふ夏のきぬれば

『謹解』 夏が来て暑くなつて来るに、山近くに住んで居つた涼しい都が一しほに懐かしい。

山近き都は京都の事である。京都は鞍馬を控へ東山あり風山あり、随つて桂川や鴨川なきの美しい流れがあるから、その山の青いのや水の澄んだのを見るだけでも涼しいものであるから、今東京に在つて、夏の日盛りに會ふとあゝ京都は涼しからうと思ふものしたまへるこの御製の中には、京都は故郷であるからこの御懐かしみもあるであらう。

大空のほしのはやしもうごこかこ

思ふばかりに木枯のふく

『謹解』 数限りもなく澤山にきらめいて居る大空の星も吹き拂はれると思ふやうに木枯が吹きぬる、いかに木枯が強いかにいふ事が想像せられるのであつて、豪宕なる御製である。

かれがれになりぬる庭のむしのねは

なかぬ夜よりもさびしかりけり

『諷解』 秋が更けて來るも鳴く蟲の聲も潤れんゝになつて了つて、あゝもう蟲の勢も弱々しくなつたと思へて鳴かなかつた折よりも淋しく感ずる。

蟲が鳴かずに居つたならば、この潤れんゝになつた哀れな聲を聴かないであらうに、鳴いて寂しい秋の心を傷つた上に、その又蟲の勢絶えて鳴き細つて行くのを思ふと、尙更に物悲しさに耐へやらぬ心地がする。あゝ一層鳴き初めなかつた夜の方が、まだしも物思ひの種にならなくてよかつたにこの御風懷である。

おのづからわが心さへやすからず

こなりの國のさわがしき世は

『諷解』 隣國の支那が平かに治り切らずに物騒がしうなつた時は、自然に自分の心も不安である。

これは支那革命の當時の御感懷である。併しながら支那は昔から幾度もゝかういふ革命が起つて替りゝして來た國であるから、到底我が國の様に連綿たる萬世一系の皇統を戴いて居る國と比較にはならぬが、それも從來善隣の誼を通じて來た國が、一朝にして變改するのは餘り良い心地のするものではない、この明治天皇の御製はさる事ながら、七千萬の忠良な國民は只管奉効の至誠にいそしんで、君國に盡す外には顧みる道は無いのである。

先帝陛下善隣の誼みに厚き思召は、廣く全世界に公示して、世界平和の春を齎し來る楔子となしたものである。

思はざる事のおこりてよのなかは

心のやすむ時なかりけり

「謹解」此の世の中は兎角に思ひも及ばない事が起るもので人の心は片時も安らかに保つことは出来ぬ。

何たる畏れ多い御製であらう。これも支那革命に關しての御口吟みであるを拜察し奉るのであるが、われ／＼國民が今日あるのは、一に明治天皇の御稜威によるものであることを日夜感激し奉つて居るものであるから、假令、世の中の凡ての國々がさうあらうとも、決して／＼それ等になづむ様な事のないのは神明に誓つて疚しからぬものであることを、事實に證明して、以てかくまでに宸襟を憐まさせられた大御心に答へ奉らなくてはならぬ。

わらはべがつくりあげたる雪の山

たかきいさををたれこさだめむ

「謹解」子供等が造り上げた雪の山は皆の子供の手がらであつて、その中の誰と決める譯には行かぬ。

侍従たちが庭におり立ちて我こそ雪を積み／＼高い山の様に盛り固めたお庭の様を目に見る様である。而してこゝに明治天皇の平等觀、一視同仁の御精神を伺ふ事が出来るのである。

まうでむと思ふ社をよそにみて

すぐるたびちのをしくもあるかな

「謹解」訪ねたい参りたいと思ふ神社に参詣することも出来なくて通り過ぎて了ふことの惜しさよ。

行幸の御時はいつも前以て御行程御日程が定められて、畏れ多いが殆ど御餘裕もおはさぬ程であるから、御通過の御道筋にある、数々の神社に御参詣遊ばされたいと思召されても、時日が許さずしてそのまゝ、その神社を他所にして御通過あらせられる御事は、敬神の御心厚き明治天皇の、いかに口惜くも心遣りある御事でおはしたであらう。

あきのよのながきをなににかこつらむ

なすへきこのおほくある世に

「謹解」 爲さなければならぬ用が澤山にあるこの世に秋の夜が長いといふて唧つもの、あるものは何といふ心得違ひであらう。

秋の夜長の燈火は殊にも親むべき筈である。心持のよい氣、涼しい風、仕事をするには誂へ向きの折であるのに、しかも澤山にある仕事をしやうともせずして、只夜長を唧つのは何としたことであらう。

この御製を拜するに恪勤なる 明治天皇の御性行を偲び奉らるゝので、吾人臣民は深く反省しつゝ奮勵すべきである。

かき根行く水にひびきて松風の

音も流るる山の下庵

「謹解」 山蔭に結んだ草庵の垣根を繞つて居る清い水に軒端の松風も響き合つてその音までが流るゝやうに聞ゆる。

一點俗塵の痕なく閑寂の清境をうつさせ給へる聖作かし。これを拜吟すれば身その境にあるの感を
おいはしむ。

すなほにてををしきものは敷島の

大和言葉のすがたなりけり

「謹解」 優しくしてそしてまた雄々しいものは敷島の大和言葉即ち、和歌の姿である。

シキシマは大和といはふとする枕詞である。そして大和言葉といふは日本特有の言語、即ち歌の事であつて、歌は心の花である。その数は僅に三十一文字であるけれども鬼神をも泣かしめ、禽獸をも感ぜしむるは衷心の響き、神來の韻であるが爲である。しかもその姿は優しいがその心は雄々しく、天地を動かすの徳に至つては古來數ある證歌の教ふる所である。

やすくしてなしえ難きは世の中の

人の人たるおこなひにして

「謹解」

世の中にあつて人の人たる行ひをすべきことは、言ひ易くして成し難いものである。

言うて行はないものは弱行薄志の徒である。しかもこれを言ふことはいと安い事ながら、些かの事でもこれを實地に行ふことは難かしい。即ち言行は中々一致し難いものであるが、これを一致せしめて初めて人の人たる道は履まれるのである。然るに段々世が末になつて来て、只理窟ばかりに走り、更に何の實行もしないものが多いのは残念千萬の事である。

いまごまにももの思ひこしふたごせは

あまたの年を経しこちする

「謹解」

色々心遣ひをして来たこの二年間は数多い年を重ねたような心持がする。

正義の爲、人道の爲、平和の爲には戦争も已むを得ぬ。しかも彼の強大な露國と戦つた三十七、八年の二年は如何に宸襟を惱ませられたとであらう。「あまたの年をへしこちする」と仰せられたのも實に御尤もの次第である。我々臣民は斯の如き陛下の深き御心盡の結果に據つて、今日世界の強國の一員として東洋に覇を唱へて居る事が出来るのを考へてみれば、是實に陛下の偉大なる御賜である。云ふ事を感謝し奉らねばならぬ、此御製によりて忘るべからざる事がある。明治四十五年七月の下旬金石も溶け草木も萎死せむとする炎熱を侵して數萬の人士は日夜正門外の廣場なる砂上に平伏して陛下の御回春を天神地祇に祈り奉つたのであつたが、御容體書は日々幾回もなく公表せられて上下一心に一喜一憂只管御平癒を祈り奉るの念に充たされた時の事である。侍醫寮、内事課等の直接關係の部局とは異り御歌所の如きは本務としての御用は極めて閑散なりしも日々出仕して大臣官房事務の一部を補助する位のものであつたが御病勢いよく進ませらるゝに付けては刻々の御容體を承はるは省内の部局よりかへつて宮内大臣田中伯爵の邸に在るを便なりと考へて目白の邸を訪へば伯は深憂に沈みて平素の快活にかはりいと沈痛なる語を以て「よくこそ来たれ今夜は共に明かさむ」とて一

室に卓を剛みて且語り且泣きつ、夜を更すうちに伯より左の事實を聞いた。今こそ語るが、實は陛下の御病氣は殆ど、九年前、日露戦役中の御發病にあらせらる。余はその當時宮内大臣として奉仕したが陛下には御惱といふ事を断じて公表してはならぬ、萬一この事を知らばこの大事變に方りて身命も惜しまず國家の爲に盡しつ、ある臣民の英氣を殺ぐの恐ありゆめく洩すべからずと詔らせ給ひし玉音猶耳に残りて、今更の如く萬感胸に浮びて云ふ處を知らずこの事を承知したるは山縣公と侍醫頭と余の三人なりき。是を思へば日露の事變は實に聖壽をさへ短縮し奉つたに申さねばならぬと聲涙共に下りし利那の記憶を、神去りまして十年の今日また茲に筆にするに筆進まず、この御製を拜誦して、一層その感を深うして言はむと欲する萬分の一をも盡す事の出来ぬのはかしこしもかしこし。おのが身をかへりみずして人のため盡すぞ人のつごめなりける」の御製と併せて拜誦せば如何なる鬼神も血涙を禁ずる事は難いであらう。今より追想し奉れば三十八年四月廿二日より六月三日まで御風氣の爲に御假床に在らせられた事がある或はその御時が御發病の御時ではなかつたであらうか。果して然らば全世界を震動せしめた日本海大海戦の前後にて空前の大快報も御病苦の中に聞召されしかを拜察すれば苟くも臣籍を帝國に有する者感慨果して如何である。

宇治川の河上まほく霧はれて

いはまの道もみゆる月かな

『謹解』 月影がほのめくと共に夜霧がはれわたつて宇治川の川上の山の岩間の小徑もみゆるようになつた。

宇治川の上流は喜撰山朝日山なごかさなりそびれて、恰、唐繪の如き景色である。中天の月華、流れゆく夜霧、さては漪漣のきらめき、さながら眼前に開展してくる。

おもほえず夜をふかしけり國のため

たふれし人のもの語して

『謹解』 國の爲めに殫れた人々の話しをして夜の更くるも心づかず、思はずも夜を更かして了つた。

國家の事に殘れた人を追懷することは、即ち、その人の勳を稱へることである。而してこれを物語るのはまた實にその勳を感謝する意味である。感謝するのは真心であつて、決して時間に制限せられるものではない。即時間の立つのも知らないで、その人のありし事共を語り續けたといふ御實感。いかに我が皇國を思はせ給ひしことの深きと、臣下の勳功を重んじさせ給ひしことの厚かりしかと拜察せられて、感泣せずには居られぬ。

里ごほき山田の早苗うゑはてて

かへる月夜やすずしかるらむ

『謹解』 人里遠い山田に早苗を植ゑ終つて歸つてくるその夜道の月はさぞかし涼しいであらう。かけはなれた山田を植ゑはつれば挿秧ももうしまひである。白銀の如き月光を浴びて早乙女達はうたひながら歸つてくる。

戦のために力をつくしつる

民のこころをやすめてしかな

『謹解』 戦争の爲め全幅の努力をした國民の心を慰め安めて遣りたいと思ふ。君國の爲めに身を挺して戦場に出て、懸命の努力をした結果、思ふやうに敵を破ることが出来て、遂に名譽ある凱旋をして來た軍人の心を慰めたいとの大御心は、即ち論功行賞となつてお手厚い御會釋を賜はつたのであるが、軍人以外、即ち多數の國民が外戦の爲めに幾多の困難と戦ひ非常なる心盡くしを爲したる其の心に、十分なる慰安を與へたいとの思召を拜するに至つては、吾人臣民は奮起せずには居られぬ。大戦後なる四十一年の聖作として戊申詔書御下賜の聖慮と對照して表面には戦勝の結果として華浮に流るゝを、誠め給ふと同時に苦痛を慰めてやりたいとの思召の有難さを沈思して各自の反省すべきは勿論宜しく子孫を教育するにもこの大御心を忘れてならぬ。

かきつばたにほへる池はかけわたす

橋こそ花のたえまなりけれ

『謹解』 杜若の咲きみちた池はかけわたせる橋だけが花の絶間である。

橋は昔ゆかしき八橋であらう。橋板だけがみわたるばかりで水の色もみわたす池には杜若が咲きみちてをる趣である。光淋風の蒔繪なき見るこゝちがする。

ここしあらばわがちからこもたのむべき

人のをしくも老いにけるかな

『謹解』 一朝國家に大事があらば相談相手と頼むべき臣等が追々老境に入つてゆくのは誠に惜しいものである。

あの者こそは自分が唯一の力となつて呉れるであらう、國家の爲めに盡すであらうと頼みに思ふ人

人も、寄る年波には勝てずして段々老朽ちて行くは誠に残念である。勿論國家といふ一つの大きな團體の中には常に新進の知識が現はれて、どんな事が起つても決して過ちのない様に處断して行くには相違ないけれども、それとも頼りに思ふ人の衰へて行くのは悲しいこの思召を拜誦せらるゝ。國家の重きなす人々宜しく自重して上は聖明に對へ奉り延いては一家の基礎を固うして永く社會の儀表たらざるべからず。

霜のうへにうつる枯木の影きえて

いまはこしらむありあけの月

『謹解』 庭の霜の上に、淡く横たはつてをつた枯木の影が消ははて、今を限り有明の月がしら

んでゆく。

幽玄の御調きたへ奉る外はない、道も達すれば此處に至るものである。畏れれば陛下は實に歌聖にあらせらるゝ。

國民のうへも心にまかせぬは

雨ごあらしのうれひなりけり

『謹解』 民の事を思ふに就けても自分の心に任せぬのは何時雨や風が降り荒れて困らざる心配の起る事があるかも知れない事である。

國民の上には常に多幸なれど、制度や法律なきによつて力めてその安寧を保護し増進する事を心懸けて居るのであるが、只心に任せぬものは天災である。何時雨が降り何時風が吹いて折角住みなれた家も吹き毀れたり植付けた稲の花を吹き落されたりしてどんな禍が起らむとも圖られない。昔、白河法皇であつたか、朕が心に任せぬものは鴨川の水を山法師と采目であるに仰せられたが、明治天皇は民を憫ます風雨の難を仰たせ給うた、有難い限りである。

むつまじく枝をかはしてさく梅も

さかりあらしそふ色はみえけり

『謹解』 睦じけに枝をかはして咲く梅も、しかも盛を争ふ色はみえぬ。

おなじクラスの學生きもの事としてもよろしからう。同門の藝術家の事にも當てはまる。よくも斯くまで人情の繊微をおうたひあけあそばされたものである。

千萬の民のこころもをさまらむ

誠ひこつをもてをしへなば

『謹解』 假令、幾千萬の民の心がわかれくになつて居つても只誠の一念を以て教へたならば、必ずよく治まるものであらう。

終始一誠意これが無上の教訓である。誠は天に通じ神に通ずる所の大きいなる道であるから、如何なるものをも正覺に導く階梯である。既に天皇御自身親らが誠を以て臨ませらるゝ上に於て、國民の何處に不誠意なものがあらうぞ、我が歴代の天皇は統治の主體であらせらるゝと同時に、吾人臣民の大教主で座まし給ふのである。君君たらずんば云々といふやうな事は支那にはあつたであらうが、わが國に於ては絶對に君主に仕へ奉らなければならぬ所に美しい國體の現れがある、況んや君王にこの誠を持たせらるゝ時に於て、民は層一層奮勵發憤せざるを得ないではあるまいか。

逢阪の關のふるみち春ゆけば

杉生かすみてうぐひすぞ鳴く

「謹解」 逢阪山の關所のあつた古い驛路をのさかなる春の日に越えてゆけば杉村がほんのりと霞んでそのおくに鶯の聲がきこゆる。

古今集に「かつこけて別れもゆくかあふさかは人たのめなる名にこそありけれ」とよまれたる逢阪

の關址は近江國滋賀郡に在る杉村をこむる霞のおくに鶯の聲のきこゆるなき漫に昔のしのはれる御製と拜見する。

わがために心つくして老人が

教へし事は今も忘れず

「謹解」 年をとつた今まで忘れないものは老人が誠心をこめて教へ導いてくれた事である。師に對する事友人の如く甚しきに至つては俸給を與へて使役する傭人の如き感を有する輩も尠からざる現今の社會に情意兼ね備はるこの聖作を拜誦せしめて過去の過を改め身分の程度に於て社會に對する重大なる責任ある事を反省せしむるに至らばせめて聖慮の千萬分に報い奉る一端ならう躬行實踐の陛下にあらせられては御製に遊ばさるゝほびの事柄は御實行が伴つて居る事を侍講として補導し奉つた故副島種臣伯に賜つた勅書に因つて十分に伺ひ奉る事が出来る伯は薨去の際まで嚴封の儘を自身の枕の下に收めて家人にも其何物たるかを知らしめなかつたこの有難き勅書を

賜る動機は明治十三年伯多病の爲に奉仕の不可能なるを以て拜辭して閑雲野鶴を友とせむの意思ある事を聞召されたからである。土方久元伯を勅使として留任の決意を促しかつ慰籍し給へる勅書の御識讓と師を御敬慕遊ばざる、御至情の優渥なるを拜讀して感泣死に至るまで恪勤天恩に報い奉りし伯の一身は素より當然の事に屬せんも天下後生に及ぼす御聖徳の如何に偉大なるかは量り知る事は難い勅書

卿は復古の功臣なるを以て朕今に至つて猶其功を忘れず故に卿を侍講の職に登用し以て朕の徳義を磨く事あらんむ然るに卿が道を講ずる事日猶淺くして朕未だ其の教へを學ぶこゝ能はず頃日来卿病瘳に在つて久しく進講を缺く夙かに聞く卿侍講の職を辭し去つて山林に入らんむ朕之を聞いて愕然に堪へず卿何を以て此に至るや朕道を聞き學を勉む豈に一二年に止まらんや將に畢生の力を竭さんむ卿亦宜しく朕を誨へて倦む事勿る可し職を辭し山に入るが如きは朕肯て許さざる所なり更に望む時々講説朕を賛けて晩成を遂げしめよ。

時に 陛下は實算三十に在らせられた此を拜受したる故伯の感激は殊り伯一人にして止るべけんや

世の中にあやふき事はなかるべし

ただしき道をふみたがへずば

「謹解」 純理を渡り正道を踏んだならばいかに世の中の波風が吹き荒れて居つても少しも危い事はないのである。

正しい道を踏んで横道に外れなかつたならば、危い事は少しもない、何となれば正しい道は人たるの道である、神の示された道である。神は絶対普遍にましまして、一大宇宙の眞理である。然りこの眞理を履み行つて居るのであるから、その眞理によつて顯れた世の中、世界、社會に少しも悖る所は無いのである。内に省みて疚しからずんば何をか憂へ何をか恐れんといふた孟子の言を一層徹底的に述べさせられた御教訓である。

いづる日の光もそひて山ざくら

まばゆく見ゆる花のいろかな

「謹解」今しもうらゝかにのほる朝日の光がさしそはつて山櫻の花の色がまばゆきまでうるはしく見ゆる。

紅い若芽がのびて花がまばらな山櫻にさし朝日の影がさした瞬間の景である。實に目もあやに鮮かなる御製であらせらる。

たたかひのかちに誇りて村肝の

こころゆるぶなわがいくさ人

「謹解」たのもしき我軍人さもよ勝いくさに誇りて精神を弛めてはならぬ。

ムラギモノは心の枕辭、戦勝氣分に慢心する不心得の軍人があつてはどの御心遣ひのほど實に恐れ多き事である。この御製を拜誦して古い記憶を呼びおこされた。それは今は故人となつた陸軍技術官から聞いた事である。廿七八年戦役が自出度局を結ばれた當時の事、參謀總長が從軍記章の圖按を捧呈して御裁可を仰いだ。陛下にはかしくも國旗を交叉して結びたるさまに御目をとめさせられ「日本の國旗は結び置く時代にあらす」と宣らせられたとの御事であつた。結ぶどころか益々振りかざして國威を擴めなければならぬとの深き思召を拜察すべきである。國民たるもの日本は「世界の強國といふ看板だけに甘んぜず益々奮勵努力してこの聖旨に報い奉らなければならぬ。國旗の自由は軍事にのみ限られたおほしめしない事は申すまでもあるまい。

こころしあらば火にも水にも入りなむこ

思ふがやがて大和魂

「謹解」一旦緩急があつたならば火の中へでも水の中へでも怖めず恐れず飛び込もうと思ふが即

ち大和魂である。

「かくすればかくなるものとは知りながらやむにやまれぬ大和魂」もいつて、火や水に飛び込んだならば命の全からう筈はないのであるが、その命にも替へられぬものが心である魂である。況んや一日緩急あらば即ち、國家の大事に際しては、この命も毛頭借む所ではない。死は鴻毛よりも輕しとして君國の爲に盡すのが眞に我日本心の雄渾なる所以である。蕞爾たる東洋の一孤島の如く輕視せられし帝國も今や其の強大を妬んで列強に畏敬せらるゝに至れるは上は聖天子の御稜威あり下は舉國一致即ち大和魂の發現したる結果たるを疑はず。

わたごのの下ゆく水のおこきくも

今宵ひと夜こなりにけるかな

「謹解」 渡殿の下をさら〜と流るゝ遣水の音、このなつかしい水の音を聞くのも今晚かぎりになつた。

明治廿三年の春、京都御所に御駐蹕あらせられてさて還幸あらせられむとする前夜聽雪にてあそばされた御製と洩れ承はつてをる、かしこけれき 陛下か如何に京都御所をおなつかしみあそばされたかその意味の御製を數首拜輯してあるが中にこの一首なき拜唱すれば涙ぐましくなつてくる。聽雪は御所内の一部にて瀟洒なる構造の御殿である。

わが心われこをりをりかへり見よ

しらすしらす迷ふここあり

「謹解」 自分の心を自分で時々省みて見るがよい、神ならぬ身には知らず〜に履み迷うて居ることあるから。

反省、自省は修養の一大要訣である。曾子は日に三たび我が身を省みた。併、別に曾子の様に規則的に自省しないで、ふと氣が附いた時にだけでも自ら省みたならば、若し知らず〜の間に誤つて履み違つて居つた事も明になるものであるから、直に正しい道に返つていよく己れを磨くこ

こが出来るものである。数多い事の中にはさういふ事も時々はあるであらう。嗚呼、嚴なるかな、御聖訓、昭憲皇太后の御歌には
かへりみて心に問はゞ見ゆべきを正しき道に何まよふらむ
かゝる 兩陛下を戴いたるわれ／＼臣民は何たる幸福であるか。

若竹のしげみもりくる月影は

くまなきよりもすすしかりけり

『謹解』 こんもりとした若竹のしげみをほのかに洩りくる月影はさほるものなくあらはなる影よりもかへつて涼しい。

窓の若竹の葉ごもりをしのびにもりくる月の光はまたこゝなる涼しさである、奉唱すれば遠く笛の音なきこゝたるやうのこゝちがする。

ひろき世にまじはりながらこもすれば
狭くなりゆく人ごころかな

『謹解』 広い世の中を狭く渡るほゞ憚れなものはない、やゝもすればさういふ人が多い。広い世の中を一層広く渡るこゝいふ事が徳を積んだ人の樂む所である。然るに彼處にも此處にも不正や不義の事をして、顔出しも出来ぬ様にわれから世の中を狭めて通る人の心は誠に淺はかなものではないか。兎角に人の量見は狭くなりたがるもので、自ら社交を狭める人のあさましさよ。これも畢竟は自省の觀念なく、徳義の道念が薄い爲めである。國民の悉くが広い世を一層広く渡る時に於て、又我が國光は一層に輝くものである。兄弟牆に閔ぐを止めて外の侮りを禦ぐが帝國臣民たるもの、焦眉の急たるを知らずや。

春風にいななく駒のこゑすなり

花のした道たれかゆくらむ

「謹解」 そよぐと吹くる春風にたぐひて駒の嘶く聲がするあはれ花かけの道を誰が分けゆくのであらうか。

繪巻物なき御覽じて御着想になつたものではあるまいかと拜察されるほかに實に優美であり華麗である。がこの御製を遊ばされしは明治十九年また赤阪假皇居の御時代で溪あり山あり深山めきたる御苑の春酣なる時 陛下は日々三四時間宛も御乗馬遊ばされ 皇后宮も御苑内の洗心亭に成らせられて元田永孚高崎正風西村茂樹久我建通中山忠能等諸人を召されて御宴あらせられしも此頃であるから御製の御實感なる事は申すまでもなく長閑なる聖世の御有様を伺ひ奉る事が出来る。

思ふこと思ひさだめて後にこそ

人にもかくこいふべかりけれ

「謹解」 自分の思ふことは必ずかう仕様と決心してから後に、初めて人にも語つて宜いが、思ひ定めないうちにこれを他に洩らすやうな事は結局不成功に終る基である。

かうしようを確く決心してからならば、人が何といはうとも、何としようとも決して意に介するに足らぬ。断々乎としてこれを行ふ勇氣があるから宜いが、これに反してまだ十分に決心し切らずに、軽々しくこれを人に語るこいふのは、その事柄が良ければ人に先んじられる虞があり、悪ければ人に嘲られる憂ひがあるから能く注意すべきことである。

厚氷こちたる池の底までも

てりこほるかこみゆる月かな

『謹解』冬の夜の月影はものすごい厚氷の一面にこぼした池の底まで照りとほるやうである。凄惨たる寒月をおよみあそばされたる御調のあざやかさ實に厚氷の底までも照りとほる冷光の如くに拜唱さるゝ。

千歳にはあえすこもよし常盤なる

松のみさをにならひてしかな

『謹解』松の千年の長い齡にはあやからなくてもよいがせめて常盤松に色かへぬその操だけは手本として見たい。

霜に逢うても凋まず、寒さに逢うても緑の色を替へぬ松こそは、眞に天公が實際によつて操の模範を示されたものである。而もその松は千歳の長い齡をも保つて、いや榮白に榮ゆる、假令長い年は我が短い人の世のあやかるべきことでないにしても、萬物の靈長たる人が、操を守らないとあつては非靈の松にも劣るものではないか。

白川の關うちこえて見しかげも

思ひぞいづるあきの夜の月

『謹解』今宵月をあふけばいにし年、白川の關で賞したその夜の月が思ひ出されてなつかしい。

白川關跡は岩代國西白河郡旗宿の南なる關山である云ふ、平兼盛の「便あらばいかで都へ告げやらむ」の歌や又、能因法師の「秋風ぞふく白川の關」の歌にて古來人に知られたる名所である。先帝陛下が明治九年奥羽御巡幸の折に通御あらせられたのは六月の十三日であつた。從駕の人の筆になつた十符の菅簾には「旗宿につきて村長をめしいでないさす、里の西のかたに白川神社にて村社あり」このわたり少し地高き處が關のあきなりとぞ、ここに寛文十二年にかの樂翁が建てられたる碑ありとせしむしてある。

いしだたみかたきこりても軍人

身をすててこそうち碎きけれ

「謹解」 石垣高く積み重ねた要塞も、我が身を捨て、顧みぬ軍人の爲めには打ち碎かれて了つた。難攻不落と打ち堅めた旅順口も遂には我軍の占領する所となつた。凡そ世の中で何が一番強いかにいふと、死んでも構はぬと決心したものほど強いものはない、ましてそれが一身の私事ではなくして、君の爲めである、國の爲めである、世界の爲めである、平和の爲めであるといふに至つては尙更の事である。旅順口がいかにも要塞堅固でも露軍がいかにも強烈無比でも、神のみ國に神のみ旨を受けた我が帝國の正義の軍に勝つ例はないのである。忠義な軍人の丹に及向ふものはないのである。

杉垣をめぐりてみれば山里は

おもはぬかたに門ぞありける

「謹解」 山里の家構のさまをかきよ杉の垣根にそつてめぐつて見れば思ひもよらぬ方面に門があつた。

杖を山村に曳けば誰も目にする景趣ではあるが、しかも天下萬人の歌人こゝに思ひ至つた者は誰一人としてある事を聞かない。陛下雲上におはしましてこの御製あらせらる實にかしこき極みである。

竹馬にこころの乗りて手習に

おこたりしよをいま思ふかな

「謹解」 竹馬に乗つて遊ぶのが面白さに、いつの間にか手習が疎そかになつた時分の事を今になつて後悔する。

あ、後悔先に立たず、あの時にもう少し勉強して置いたならばこの不自由はせまいものを、つくづく昔の怠りを悔むことは誰もあり勝ちの事である。その誰もあり勝ちな事を見もし聞きもし居ながら、子供心の遊びに馴れては手習もおろそかになるものである。能く注意して習ふべき時

には十分に習うて置かねば、習ふことの出来ない時になつて、習ひたいと思つても、もう事情がこれを許さないのである。

なかなかに風のたえたるよはにこそ

おつる木葉のおこはきこゆれ

「謹解」 風の吹きすさぶをりよりもかへつて風のたえたる夜分にほろく木葉の落つる音がはつきりきこへる。

實に落葉は風に吹きたてられて散りみだる、より、ものしづかな夜半にほこりほこりきこちゆくがあはれ深きものである、そこをあそばされた御製を拜唱する。

うつせみの代々木の里のなりどころ

花のこずゑも苔むしにけり

「謹解」 代々木の御料地内の茶屋はもの古りて花の木の間までには青苔がむしたあ、なつかしい。代々木の御料地内にはもの古りたる木立があり、水鳥のおりある池もあり、古くより將軍が鷹狩を催すための假屋もあつた。御料地になつてからは行幸もあり行啓もあつておなつかしみあそばされた。その地に宮柱太しく立て、御英靈を奉祀することになつたのは實に奇縁に申すべきである。ウツセミノは代にかゝる枕辭。ナリドコロは産業處、即、田庄の義より轉じて別墅なきの意になつた。なほこの外に「うつせみの代々木の里はしづかにて都の外のこと、ちこそすれ」と遊ばされたのがある。離宮御用邸も數多あるが殊にこの御場所に限って静閑を賞し古色をめで給ひしは御遊覽等の絶わてあらせられざりし、陛下には御威尤も深くあらせられし事を拜察す。

むらさきもの心のかぎりつくしてむ

わが思ふことなるもならずも

「謹解」 自分の思ふことは成就してもしなくてもこの正しい心の向ふ限り力を盡して見よう。

成否は物の数ではない。出来る出来ないは第二の問題である。が思ひ立つた事は、その自分の正しい心に問うて見て、疚しくないし確信した時には、その心の限りを盡し、その力の限りを盡して奮闘努力すべきである。成否は勿論問題では無いが、併しこの正しい道は、この強い力を致したものに不成功なるべき謂れは無い、申すもかしこき極みであるが陛下の御大業が世界古今を通じて絶対無二の模範である。

のぼりきて窓をあくれば鶯も

たかきにうつる聲さこゆなり

『謹解』 高殿にのぼつてきて窓を開けば鶯も亦高い梢に移るこゑがきこわる。

主人が高樓に上りきて窓を開けば、庭の鶯も高き梢に移りきて朗に啼くと云ふ御趣向を拜察する。

こゝなくして治まる代にも民のため

思ふこゝろはやすむ時なし

『謹解』 國家が無事に治まつて居る時でも、民の爲めにさうすれば幸福であるかと思ふ心は思ひ届かない。

辱ない御製ではないか。明治天皇の大御心の中には國民の外の外は無いと拜察し奉る時に於て感涙の滂沱として流れ落ちるを禁ずることが出来ない。勿論國民の事を勞らせ給うた天皇は御歴代何れも皆さうであるが、わけて明治天皇におかせられては、一層熱烈に大御恵を垂れさせられたのである、かほこの御軫念があらせられたればこそ、御在世當時は更なり、御亡き後の今日まで恐れ乍ら國民が擧つて慕ひ上げ参らせて居るのである。民本主義の民主主義の立ちさわぐ者共でもこの御製を拜したならば、忽ちに天にひれ伏し地に額づいて、改めて國家の爲めに盡すことを誓ふべきは深く信じて疑はない所である。

このあさけひと村雨やふりつらむ

樅のわか葉につゆのたまれる

「謹解」 樅の若葉に美しい露がたまつてをる。氣づかずに居つたけれど今朝ははやひとしきり村雨がふつたのであらう。

樅の若葉は前人の思ひ及ばなかつたところである。村雨の名残りの露の白玉の如きみづくしき御調である。

遠山の雲もうごき秋の野の

茅原かやはら風わたるなり

「謹解」 遠山の端に棚引いてをつた白雲も動いて秋の野の茅原や萱原にさらさら涼しい秋風が

吹く。

目路遠き山の端にかつてをつた白雲も水の如く軽く流れて、ところ／＼穂にあらはれた秋の野の茅原萱原に秋風が吹きわたる。云ふ廣く鮮かな御趣向である。景の歌は目に見ゆるやうに情の歌は心に徹るやうに。云ふ事を聞いて居るが、この御製なき實に目に見ゆるやうである。歌を評するのに「繪の如し」なきよく云ふことであるが、この御製なき綿のやうに軽く流れてゆく白雲、茅萱の葉のさびしきさ、やきが目に見ゆるやうである。耳に聞ゆるやうである。實に何にも評し奉るべき言葉もない。

さみだれに疊のうへもしめれるを

たむろのうちぞ思ひやらるる

「謹解」 ふりつゞく梅雨に宮の中の疊の濕つたのを見ても出征軍人の屯する假屋の鬱陶しさが思ひやられる。

連日連夜の梅雨のいぶせきにつけて出征軍人をおほしあらせ給うた三十八年の御製で當時これを拜誦せしむる事の叶はざりしを今更ながら遺憾に感ずる。

園のうちにくゑたる稲もいろつきぬ

里人いまか山田かるらむ

『謹解』 御苑のうちに植ゑさせた稲も、もうこのまほりに色ついた、農夫達は今しも稲刈をは

じめることであらう。

あの神々しい御苑の内には田圃のさまをも御つくりをあそばされてあるそれを御覧遊ばされて農民の稼穡のさまをおほしやらせ給うたものと拜察されるかしこき極みである。

咲く花を宿にのこしてしづのをは

長さ日ぐらし小田にたつらむ

『謹解』 家に咲いてをる花を見る暇もなく農家の人々は長い春の日を田にたつて仕事をしてをるであらう。

我家の垣根の花が美しく咲いたからきて半日の暇を得て見はやさうと云ふこともなく長い春日を終日出晴の間にいそしむ農夫等の勞苦をおほしやらせ給ふた御製で、御仁慈念ながら長き極みである。

この忝なき御製を拜誦する小田の益荒雄ごもは一層鋤鋤に手力をこめて働くことであらう。實に御製は千古不磨の聖訓である。國民たるもの上下老幼の別なく、時々拜誦して我心を勵まし我心を慰めて奮勵すべきである。

おのがじし任務を終へて後にこそ花の陰に立つべかりけれの聖作と併せて拜誦せば一層心身にしみ渡るであらう。

堤ゆく人影たえてすみぞめの

夕霧くらし寺島のさくら

「謹解」堤の上を行きかふ人影も絶えて寺島の里曲を薄く夕霧がつゝんだ。
墨染ノは夕霧のユフだけにかゝれる枕辭である。「寺島の里」は云ふまでもなく向島の郷名である。遊客の絶ねぬ隅田の長堤も夕暮は人足が稀になつてほんのりと夕霧が立ちこめた云ふ秋夕の幽寂の氣分のあらはれた御製である、堰杖にあたる波の音もかすかに響いてくるやうなこゝちがする。

霧はらふ翅のおこもきくばかり

まぢかき空をわたるかりがね

「謹解」霧を打はらふ翅の音もきこゆるやうな間近い空を雁が鳴きわたることよ。
實に曉天の濃霧を打拂ふ羽音が聞ゆるやうの御調べである、歌を机上のつくり物と心得てをる世の歌人はこの御製を反復拜唱して悟るがよろしからう。

月の影ふまむと思ふ淺茅生に

みちてきこゆる蟲のこゑかな

「謹解」おりたちて月影を踏まうと思ふ庭の淺茅生には蟲の聲がみちくして分け入ることが出来ぬ。
月はみ空に皎々と光つてをる。御苑の淺茅生には唧々たる蟲聲が満ちてをる。靜に玉歩をお停めあそばされてをる大御姿が神々しく目にうかんでくる。實に御巧と申上ける外はない。

早苗ころこゑぞにぎはふたたかひに

いでにし民も里にかへりて

「謹解」出征してをつた若い人達も皆、それぐ里へ歸つてきて今年は田植をする聲が賑はしう

戦後の農村の賑はしさをおほしやらせ給うた御製である。かしこければ「子等はみないくさのにはにいではて、翁や一人山田もらむ」の御製と對照して斯く迄に農民を憐ませ給ふた大御心のほごを肝に銘して忘却してはならぬ。

ありあけの月の雫をばちす葉の

うへにのこして夜はあけにけり

「謹解」 有方の月の雫を池の蓮葉の上のこして夏の夜はいさぎよく明けはなれた。

白銀の玉の如き荷葉の上の露、それが有明の月の雫である云ふ御見立てがまづ御奇抜である。嗚呼、何といふ涼しい御着想であらう。何と云ふ清い御措辭であらう。畏れれき拜誦すれば世の塵に遠い御死の夏の曉が思ひやられて、心にすがくしさをおほわてくる。

はたたかみ光きらめく夕立に

蔀おろせこいひさわくなり

「謹解」 夕立の雲が軒近く垂下して電光がキラ／＼するのでサア蔀をおろせサア蔀を三人々が

言ひさわぐんじよ。

ハタタガミはハタタク神にて即、霹靂である。夕立の雲に包まれたもの深き御死の木立に電光が閃きてざあざあ降りいづる夕立の雨に「お蔀を」「お蔀を」と呼びつゝ、女房や内舍人達が渡殿を行きかふさまが目にもみぬるやうである。一首の御格調も夕立の如く豪壯で實に情調一致の御名歌と申すべきであらう。

かたはらに眠るうなるは夏草を

刈るしづの女がうまこなるらむ

「謹解」 照る日盛に夏草を刈つてをる女の可愛い孫であらう、傍にすやく眠つてをるのは。老婆は丈にも餘る夏野の草をさらく刈りすむ。いたいけな髪髪子は神籠の蔭なきにスヤ／＼と眠つてをるのであらう、白百合の花を手に持ったま、で。陛下にはかうした郊外の實景を九重雲深きあたりにおはしまして恐れながら御承知あそばしたのである。眼前に觀察する自由を持ちながら詩材に苦しむ下さまの歌人は大に愧づべきではあるまいか。

いはほさる音もしめりて春雨の

ふる日しづけき白川の里

「謹解」 石工さもの鑿の音もしめやかにきこえて春雨のふる日は白川の在所も、のしづかである

「白川の里」は白川越えて京都より近江に越ゆる舊往還で樹木森鬱として溪流潺湲たる仙境である。景樹の歌に「里人はいはほきりおます白川のおくにきこゆるさを鹿のこゑ」なきあるやうに古來石材の産地である。火花を散す石切の鑿の音もしめやかにきこえて、しとしと、煙のやうな春雨がふりそ

そぐといふ、いかにも閑寂な典麗な御趣向である。四條派あたりの名工の墨繪なき見るこゝちがする。

いつはらぬ神の心をうつせみの

世の人皆にうつしてしかな

「謹解」 偽なき神の心をさながら世の中にもありとあらゆる人すべての心につつしたいものである陛下には虚偽といふことを絶対に御排斥になつた、七千萬の同胞に、世界の人類すべてに、神明の如く曇り無き偽りなき心を持たせたいとの思召である。陛下はかしくも御身を以て下萬民を御導き遊ばされた。詞を換へて言はば陛下の大御心は即ち、神明の心であらせられるのである。それに就いて洩れ承つた事がある。海防費獻納の頃には恐れ多き事ながら宮廷に於かせられても御節約を行はせられたその時に神殿の御祭祀に關するもの。皇太后宮御手元の御費用にはおしおよほさぬやうに宮内大臣に御内命を下させられたとの御事である、天祖に對し給ひ、御皇妣に對し給ひ、實に至仁至孝の大御心、只々感泣の外はない。

めづらしきこの初聲をほこごさす

多くの人にきかせてしかな

『謹解』 今の時鳥の一聲はめづらしかつたがこれも朕一人で聞かずに多くの人に聞かせてやりたいものである。

陛下の御仁慈はすべて是れである。美しい花を御覧しても、めづらしき鳥の聲を御聞きあそばされても直にすべての人に見せてやりたい、多くのものに聞かせてやりたいこの御仁心であらせらる。この一首も即ち、この大御心の進りである。實に郭公の初聲には耳を傾けぬ下民の末に至るまでこの御製を拜唱しては涙ぐむことであらう。

春の野にむれてあそべる若駒を

庭にはなちてみまほしきかな

『謹解』 春の野に打群れてをる若駒をこの御苑の内に放ちやりて心のまゝに遊ばせて見たい。牧場に群る、数多くの若駒を縁いろ濃き御苑の内に放ちて心のまゝに遊ばせて見たいといふ思召を拜誦される。何といふのびやかな面して廣く大きい御着想であらう。四五の句に至つてはアツと驚くの外は無い。

これ等をこそ帝王の御調を申すべきであらうと伺はれる。

花の影ふむ人もなき故郷の

おぼろ月夜やさびしかるらむ

『謹解』 花の木蔭をゆきつもさびつしてめづる人もない故郷の朧月夜はさぞ寂しいことであらう。

長くも陛下には花のあした、月の夜ごろに京都の御所をおしのびあそばされ、おなつかしみ遊ばされたことが、是等の御製に據つて拜察し奉ることが出来る。靜に奉誦すれば李白の「誰家玉笛

暗飛聲。散入春風滿客城。此夜曲中聞折柳。何人不起故園情」云ふ詩も思ひ出でられて萬感胸に迫る。

のぼり來て窓を明くれば鶯も

たかきにうつる聲きこゆなり

「謹解」高殿へ登つて來て窓を明けて見るに麗らかな春の日影に庭の若葉の匂ひもゆかしいその中を、山樹から上へくゞ鳴き移る鶯の聲が聞えて來る。

只拜誦すれば御實威の御歌として、さも春の長閑な有様を思ひ浮べる許りではあるが、更に靜思すれば深長なる御意味が含まれて居るのを伺ひ奉るこゝが出来る。凡そ向上があらゆる萬物の目的であることは、これ宇宙の本來である。これ自然の眞理である。而してまた日本帝國の前途が益々向上發展して、遂には高遠なる一大理想の聖境に、永く宇内無二の國威を發揚することは、惟神の國として元より寸毫も疑ふべき餘地は無いのであるが、併しながら各列國皆文化の絢爛たる光を放つこゝ

を競ひ進んで居る時に方りては、些かも怠慢、懶惰の心があつてはならぬ。見よ無心に鳴き渡る鶯でさへも下より上に移り登つて行くではないか。況んや有情なる人に於てをや。況んや意義ある國家に於てをや。嗚呼、先帝陛下の大御心はごこまでも偉大勇壯である。

(終)

大正十一年九月一日印刷
大正十一年九月五日發行

明治天皇御製集
不許復製

謹選者 千葉胤明

發行兼
荒木利一郎

印刷所
大阪府豊能郡美面村平尾七百卅七番地
株式會社 大阪毎日新聞社

發行所

大阪府北區堂島
番
振替大阪四五〇番
東京市丸之內
番
振替東京二八〇番

大阪毎日新聞社
東京日日新聞社

HEAT-2P

終